

森は海の恋人（8 海遍路 伯耆大山の恵み）

「今いのちの現場はどうなっているのでしょうか？人の身体や暮らしは森・里・川・海が健康であることに支えられています。いのちの故郷である海や水辺から日本人の自然観に触れ、大人や子供達が自然と共に遊ぶ未来を探れないか？海遍路は、人を巡り、知恵に出会う旅を続けます。」

数年前に四国一周から始めて三陸海岸・有明海など年に1～2回(1回は10日間程度)旅を続けている「海遍路」という活動があります。上記はその趣意書のようなもの。その「海遍路」のコアメンバーの一人がこの連載の3回目「森里海連環学」でご紹介した田中克先生(2018年現在御年75歳)、京大フィールド科研の初代センター長です。その海遍路に昨年10月の琵琶湖編に2日間、今年の5月鳥取編は初日から4日間同行させていただきました。

海岸沿いに手漕ぎの舟を漕ぎながらふらっと漁港に立ち寄り、そこで出会った人達(主に漁業者)に話を聴きながら旅を続けます。基本的に漁港内でテント泊。食材はなるべく現地調達。どんなものをどのようにして食べているかはその地の暮らしを知る上でとても興味深いのです。

古来より日本人は森で涵養された水に依存し、その恵みを受けて生きているということに改めて意識させられる4日間でした。

鳥取の海岸を淀江から東方向に網代まで約100kmを漕いでみて、やはり大山は最も重要な存在でした。御来屋・御崎の漁師は船を持たなくても漁ができる。遠くへ移動しなくても歩いて或は泳いで行ける所でワカメ・アワビ・サザエなどが採れるのだそうです。鳥取東部の漁師もわざわざ船を走らせてこの辺りまで来て、さわら・ハマチ・岩牡蠣などの漁をするそうです。

日本海には対馬暖流が流れています。冬は大陸から寒気団がやって来ます。北西の風は強くて寒い。でも海水温は高い。上空が冷たく海上は暖かい。冬の日本海側は常にこの不安定な大気の状態が続くそうです。いつもどんより曇っていて湿度が高い。冬は洗濯物が一日では乾かないという話のある奥さんから聞きました。いつも大気が湿っているのだから標高1,700mはある大山の北面には大量の雪が降ります。降り積もった雪が春になると解けだし、広葉樹と針葉樹の混じり合った森の地中に浸み込み、たっぶり時間をかけてやがて日本海に湧き出します。大山の北側に位置する沿岸には大量の植物プランクトンが発生することでしょう。ちょうど淀江・御来屋・御崎の辺りです。アカモクを筆頭に延々と海藻の群落が続く海岸線は本当に圧倒的でした。またこの辺りは島根半島東端の美保関の風裏になる為穏やかな漁場なのでしょう。

推薦図書：youtube・facebookなどで「海遍路」を検索して下さい

TENSIO 井上好司